三十四、尾仲村の九郎左衛門

江戸時代に書かれた『筑前国（ちくぜんこく）続風土記（ふどき）』という書物があります。

これは貝原益軒（かいばらえきけん）（注）が十六年かけ、藩命により筑前（現在の福岡県の一部）の全村を歩き、領内各郡の地勢、名所旧跡、社寺仏閣、各村々の状況などを記した地誌です。当時（江戸時代）の筑前の地理や文化、また各地の状況などを知るための貴重な資料としても有名です。

この『筑前国続風土記』十八巻の最後に、江戸時代のはじめころ尾仲村（現在の篠栗町大字尾仲）に実際に住んでいた九郎左衛門という人の話が書かれています。

この村（尾仲村）に、近年まで九郎左衛門という農夫が住んでいました。彼の実父は太郎左衛門といい、やはり農夫でした。

九郎左衛門は、元和四年（一六一八）戊午（つちのえうま）の歳に生まれました。彼は幼いころ博多の魚商人の養子になりましたが、養父が若くして亡くなったので実家に戻り、その後商人になり、山村や漁村に行商に出かけ、また自ら田畑も耕していました。

いつも倹約して仕事を一生懸命にしたので、後に多くの財産を持つようになりました。しかし、朝夕の食事では、麦、粟（ひえ）、稗などの雑穀を食べ、お米は食べませんでした。衣服もとても粗末で古い木綿やボロ布を着て、生活全般はとても質素なものでした。

自分が住んでいる村やその他の村人たちにお米やお金を貸し、年末までに返せる人には利息を付けて戻してもらいました。しかし、その人がまだ必要であればまた貸しました。また、困窮（こんきゅう）している人には催促しないでそのまま貸し与えました。

昨年の寅の年は凶作でしたので、自分の村や周囲の村の飢えている人には、もみを三十俵ほど与えて救いました。（中略）また、郡中の村々の寺社にも、自分の財産を使って寄進することも多かったそうです。

九郎左衛門は毎年、衣服を新調はしますが、自分はいつも古くて破れている物ばかりを着ていました。家が貧しく衣服に不自由している人がいれば、秋冬に新調した衣服を取り出して貸し出し、春が来て暖かくなれば戻してもらい、洗濯をして、また次の秋冬のために用意をしました。そのような貧しい人のなかにも、衣服を持たない人がいれば、そのまま与えて取り戻すことはありませんでした。

篠栗へ通じる大通りや、村の道に水が溜まり、行き交う人が不便に思っているのを見かけると、人に知られないように飛び石を置き、ところによれば板をも渡していました。このほか、このように人を助けたことはたくさんありましたが、善いことをしても自分の名前を言わなかったので、詳しいことはよく知られていませんでした。

元禄四、五年（一六九一、一六九二）の頃、正月二十六日に大風が吹き荒れて、尾仲村の甚九郎と三七という両人の家が吹き倒され、困っているのを見て、米を一俵ずつ与えました。また堅糟村にある庄屋の小作人の家も倒れていたので、米を持っていかせました。

このような貧しい人々に、米を少しずつではあるけれども、毎年与えていましたが、自分の行いを言わなかったので、詳しい事はよく知られていませんでした。

自分の村やそのほかの村に毎年お米を貸していましたが、この年は凶作でしたので返済が出来ないだろうと思い、銀一貫五百目余りと米五十俵余りを渡しました。また、このことも人には言いませんでした。（中略）

ある日、九郎左衛門は、村中の若者にこう言いました。「田畑を耕していないとき、また雨天や大雪の時、さらに夜中や外での仕事が出来ないときは、縄を編んで集め置き、それを売って小銭を稼いだりして、自分が若いときはすでにこのようにしていました。今は、年老いて外での仕事が出来ないので、いつも縄ばかりを編んで小遣い稼ぎをしています。みなさんもこのようにしなさい。」

これを聞いた村中の人たちは、もっともなことだと思い、九郎左衛門の勧めるとおり若い人も年とった人も、暇なときは縄を編み、博多の縄問屋に売ったので、生活費の足しになったそうです。

「村中で身持ちの良い頭百姓の子どもも、みんなと同様に博多や福岡に出て、肥やしを買って持ち帰り、田畑を一生懸命耕しなさい。わたしも若いときにはそうしましたよ。」とも言いました。

これを聞いた人たちは、九郎左衛門が裕福になったのは、そのように一生懸命働いたおかげだと思い、頭百姓の子どもをはじめ、皆も同じく博多や福岡へ行って、肥やしを買って帰り、耕作の助けにしたり、九郎左衛門に倣ってそのほかのことにも一生懸命精を出しました。そのおかげで、元禄の中ごろには、すでにこの尾仲村の各農家は、昔から比べて裕福になったそうです。（中略）

いつも粗食で美食はせず、贅沢（ぜいたく）などもしないで家業を一生懸命していたので、若いときから元禄十一年（一六九八）までの八十余歳になるまで薬を一服も服用せず、病気なども、健康に過ごしていました。二、三里（一里＝約四キロメートル）の道も、一日のうちに簡単に行き来していました。

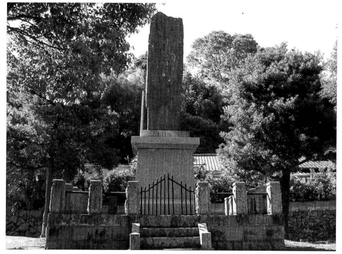
右に書かれた物語は、元禄十一年に、尾仲村の庄屋頭百姓が役人に書いて出したものです。

九郎左衛門は、元禄十四年（一七〇一）に八十四歳の時、尾仲村で病気により亡くなりました。

当時、九郎左衛門が生まれる三年前の元和元年（一六一五）には大阪夏の陣が起こり、また九郎左衛門が十四歳になった年の寛永九年（一六三二）六月には、福岡藩が潰されるような栗山大膳騒動が勃発しました。九郎右衛門が十九歳の寛永十四年（一六三七）には、島原の乱が起こり、世間を震撼させました。

尾仲村は昔、大宰府天満宮の社領で、老松神社（写真①）があり境内の大池には反橋、直橋など三つの橋が架けられ、九月二十九日の祭事には神輿を担いだり、猿楽、流鏑馬（やぶさめ）などの行事が執り行われるような大社であったそうです。

（写真①）老松神社



（写真②）貝原益軒学習の碑（飯塚市）

（注）貝原益軒（一六三〇―一七一四年）

江戸時代の本草学者であり、儒学者（じゅがくしゃ）でもあります。福岡藩に仕え藩命により『黒田家譜』を編纂（へんさん）しました。また、藩内の歴史・自然・史跡名勝・民俗などを自らの耳と足により収集し、『筑前国続風土記』（完成時八十歳）をも編纂しました。他にも『大和本草』、『養生訓』など多数著書があります。

貝原益軒は、筑前国福岡藩士であった貝原寛斎（かんさい）の五男として生まれました。幼少（八～十一歳）のころから読書家で博識な一面を持っていましたが、自分の目で見、手で触れ、耳で聞かないと納得しない頑固な性格でもありました。益軒は、このころ父寛斎とともに八木山で過ごしており、現在の飯塚市八木山の知行所跡に「貝原益軒学習の碑」（写真②）があります。益軒は、父が福岡城下へ行くときに幾度か同行し、その際尾仲を何度も通過したことがあったであろうと想像できます。そのため、この『尾仲村の九郎左衛門』の話を聞くことが出来たのではないでしょうか。

篠栗町歴史民俗資料室